

特別企画

大分大学経済学部・観光学会と共催でシンポジウムを開催 「観光立国への大分県の挑戦——芸術・文化・スポーツを含めて——」

日時 平成27年11月21日(土) 13時～17時
場所 大分県労働福祉会館 全労済ソレイユ3階「牡丹」
主催 大分大学経済学部・大学院経済学研究科・日本観光研究
学会九州・韓国南部支部

協賛 大分大学大学院経済学研究科同窓会「四極青雲会」
日本交通学会観光スペシャリスト・インタレスト・グループ
観光九州アカデミア

基調講演 演題 JR大分シティ代表取締役社長 関信介氏(大29回)
(パネリスト) JR大分シティ代表取締役社長 関信介氏(大29回)
大分県芸術文化スポーツ振興財団 経営企画本部
アーツラボトリリー室 参与兼室長 三浦宏樹氏
大分市観光協会副会長 高橋水月堂代表取締役
高橋幹雄氏(院36回)
(コーディネーター) 大分大学経済学部
大井尚司氏

四極青雲会会長の開会挨拶

本シンポジウム「観光立国へ

の大分県の挑戦——芸術・文化・
スポーツを含めて——」は、大分
県の観光の展望を見据えるうえ
で極めて有意義で前向きな試み
です。開催にご協力戴いた関係
者に心より感謝申し上げます。

講演者、パネリストの方々は元
より、ご参加の皆様による県觀
光の発展にむけた活発な議論が
行われることを期待しています。



大井 尚司氏による開催趣旨

大井 尚司氏

大分市では2015年の春ま
で、文化施設としてのホルト
ホール大分、芸術施設としての
大分県立美術館が相次いで開業

しました。また、2015年3
月には東九州自動車道がほぼ全
面開通し、4月には大分駅ビル
とJR大分シティも相次ぎ全面
開業しました。
7月から9月にかけてJR
のデステイネーションキャンペー
ンで全国的に大分が宣伝され、大分への多数の来訪客の誘
致につながっています。ラグ
ビーワールドカップの会場にも
選ばれ、国民文化祭の開催も決
定しましたので、今後の大分は
スポーツ・文化の振興も含めあ
らゆる面での振興が期待できま
す。全国的なトレンドであるイ
ンバウンドの増加傾向なども踏
まると、大分の活性化には、
芸術・文化・スポーツのもつそ
れぞの強みを活かして、そこ
に交通・観光・大型施設を結び
つけることが不可避になつてく
ると考えられます。以上から、
これらの問題について関係する
当事者が一同に介して対談する
ことによって更に広く理解を深
めるとともに、一層の活性化に
期するきっかけになればいうこ



JR大分駅北口

とで今回のシンポジウムを企画した次第です。

関信介氏による基調講演
「地域を元気に」



関信介氏

国鉄の民営化以降、JR九州は多角的事業展開をしてきた。JR九州発足時の昭和62年度の総売上は約1,500億でその中80%が鉄道事業の売上であった。平成25年度は総売上が約3,500億になり鉄道事業の売上は全体の40%である。

JR九州のグループ企業は35社にのぼり、運輸サービス、建設、駅ビル、流通・外食、観光、レジャー、マンショングループは、安全とサービスを基盤として、総合的なまちづくりを行なう企業グループとして発展していきたい。

ここで大分県ならびに大分駅周辺に話題を転じてみる。大分県は新産都効果で工業出荷額が九州他県と比べて多く産業構造のバランスは優れている。人口は少子化・高齢化で減少傾向に

2位である。九州で5番目に人口の多い大分市に限っては老壯青の人口の年齢構成バランスもとれている。

県人口の約40%を占める大分市は、駅の北側約1キロ圏内に都市機能が集中立地しコンパクトシティを形成している国内でも稀な都市である。

大分市のデータに依れば、平成12年には約50万人が中心市街地を訪れ回遊していたが、平成25年では約30万人まで激減している。

現在、大分市は駅を中心に、国・大分県・大分市が三位一体となつたまちづくりが行われている。大分市中心市街地活性化事業、大分駅付近連続立体交差事業（高架化）、大分駅南土地区画整理事業等である。

さみしかった駅南（駅裏）も都市型住宅エリアと生まれ変わり、高架化により南北の人の往来も活発になった。総事業費約2,000億円とも言われ、いまや愛されるエリアとしている。

これも時間的に限られた工期のなか、述べ20万人の職人さんの技と心意気と汗の結晶のおかげであり、職人の皆様方には只只感謝の一言です。

地域が元気になることが当社の思いである。地域の元気づくりのため、JR九州グループがその一翼を担つていただきたい。

皆様これからもどうぞよろしくお願いいたします。

今春完成した駅ビル商業アリ

交通論の領域からの情報提供

数誘致しバラエティに富んだ飲食・物販・書店・シネマなど構成され、アミューズメントパークとして賑わっている。オープン後の4ヶ月で来場者は1,000万人を突破した。驚異的ともいえる集客は、約2000本の樹木を植栽し4,500平方㍍の日本一広い屋上庭園、地上80mの屋上で天然温泉露天風呂を備える「シティスパベンチ」、木のぬくもりを感じるゆったりとした高層ホテル、まちと駅をつなぐ整備された開放感あふれる駅前広場、そして水戸岡鋭治氏の南蛮文化を想起させるシンボリックなデザインなどの相乗効果に恵むといえる。

県都大分を象徴するランドマークとして、永く多くの人々に愛されるエリアとしていた。これも時間的に限られた工期のなか、述べ20万人の職人さんの技と心意気と汗の結晶のおかげであり、職人の皆様方には只只感謝の一言です。

基調講演をうけて大井先生より、主に九州・大分の交通に関する基礎的な情報提供がなされた。具体的にはバス、鉄道、飛行機、車などの九州圏内および大分県の利用状況の推移、クルーズ船の寄航港、LCCの増便・新規就航、観光客の入り込み手段、到着地から周遊地への移動手段などの基礎的なデータ分析である。

概して鉄道は比較的順調に推移し、バスは九州自体全国的に見ても、利用度が高いもの、地方バスの需要は年々低下傾向にあり、車の所有台数は既に900万台まで増え、中山間地では一家に複数台が当たり前になっている。航空ネットワークはソラシドエアやLCCの大分県の利用状況の推移、クルーズ船の寄航港、LCCの増便・新規就航、観光客の入り込み手段、到着地から周遊地への移動手段などの基礎的なデータ分析である。



大分県立美術館

の動線が太くなつた。交通の面から観光に多角的なアプローチがなされれば、意外な新しい発見もあるのではないだろうか。観光客の九州への入り込みは、立地的にみて福岡は別格としても確実に広域化し、地域間競争は益々激化する。大分の持つ素材を冷静に分析し、その強みと弱みを総合的に把握した上でことにあたることが肝要である。

JR大分駅の集客能力は高く、東九州自動車道も開通した。大分はもはや閉じた地域ではないが、各種大会や行事が終わってから観光が一気に萎んでしまうといけない。大分は引き続き注目される地域であり続けなければならぬ。一定のインフラ整備が整った後は、横軸を太くするなどの交流活発化も将来の切り札として必要になるのではないかと考えている。

世界に目をむければ、英国は創造都市の取り組み先進国であり、2015年の大分経済同友会が行つた英國視察から学ぶ点が多い。英国では、2012年のロンドンオリンピック・パラリンピック開催に伴つて国内各地でアートイベントを催し、各種の市民参加型プログラムを企画して多大な効果をあげた。英国资本の「おおいたトイレンナーレ」、別府市の「オン・パク」、「別府アルゲリッヂ音楽祭」、現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」、国東半島や竹田市の芸術祭など、オリジナルな観光資源が誕生してきている。県立美術館では、来訪者が既に50万人を突破した。別府市の「混浴温泉世界」にも大勢の宿泊客が訪れており、県立美術館と同様に遠方からの来訪者も多い。

三浦 宏樹氏

三浦 宏樹氏のご提言

分野の専門的な人材の育成など戦略的な取り組みが重要であると痛感した。芸術・文化・スポーツに観光振興という側面

大分県の人口減少・少子化・高齢化は、待つたなしの状況である。こうした環境の中で、大分県を発展させていくうえで

は、従来型のハードの整備に加えてソフト面からのアプローチも欠かせない。そうした取り組みに際して、世界の成功事例に学び、観光のコンテンツとしてアートとスポーツを付け加えることは極めて重要である。

その発想を下支えするのが、文化の創造力を活かした都市の活性化という「創造都市」の概念であろう。

世界に目をむければ、英国は創造都市の取り組み先進国であり、2015年の大分経済同友会が行つた英國視察から学ぶ点が多い。英国では、2012年のロンドンオリンピック・パラリンピック開催に伴つて国内各地でアートイベントを催し、各種の市民参加型プログラムを企画して多大な効果をあげた。英国资本の「おおいたトイレンナーレ」、別府市の「オン・パク」、「別府アルゲリッヂ音楽祭」、現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」、国東半島や竹田市の芸術祭など、オリジナルな観光資源が誕生してきている。県立美術館では、来訪者が既に50万人を突破した。別府市の「混浴温泉世界」にも大勢の宿泊客が訪れており、県立美術館と同様に遠方からの来訪者も多い。

三浦 宏樹氏

三浦 宏樹氏のご提言

分野の専門的な人材の育成など戦略的な取り組みが重要であると痛感した。芸術・文化・

スポーツに観光振興という側面

大分県は「おんせん県おおい

し、国内観光・インバウンド観光を推進している。温泉、食、

自然など、観光資源は実に豊富であり、大分県の観光のノビシロは大きい。これからは特

に、2018年の国民文化蔡、2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京オリ

ンピック・パラリンピックの開催などに大きな期待がかかっている。

県都大分市では、中心市街地に念願の県立美術館が完成し「進撃の巨人展」などの優れた企画で県内外からの来場者が増加している。その他にも、大分市の「おおいたトイレンナーレ」、別府市の「オン・パク」、「別府アルゲリッヂ音楽祭」、現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」、国東半島や竹田市の芸術祭など、オリジナルな観光資源が誕生してきている。県立美術館では、来訪者が既に50万人を突破した。別府市の「混浴温泉世界」にも大勢の宿泊客が訪れており、県立美術館と同様に遠方からの来訪者も多い。

高橋 幹雄氏

高橋 幹雄氏のご提言

からアプローチし、県内外のビッグイベント開催に乗じて国内外に大分県の魅力を発信しつづける戦略的な仕組みづくりが急がれる。

大分県は「おんせん県おおい

施設の県立美術館とさまざまなかたちアートが触媒となり、来訪者が回遊する空間づくりができるれば良いと考えている。シティホテル、ビジネスホテルを中心の宿泊施設構成も、団体旅行から個人・グループ旅行へシティホテル、ビジネスホテ

ルの転換が進んだ現在では、観光振興の障害とはならないだろう。個人・グループ客の多くは食泊分離を選好するため、とり天や琉球などに代表される大分の食文化にも観光資源としてさらなる期待が待てる。

このように大分市では今後、都市型観光の振興に力を入れていくことが重要である。アートの魅力は深く、都市の良好な環境づくりにはパブリックアートの導入も鍵となる。このシンポジウムを契機に、なぜ観光に芸術・文化・スポーツなのかといふことについて、改めて考えてみてはいかがだろうか。

け私の生まれ故郷の大分県佐賀関町の良さが理解できた。帰郷後、さまざまな地域活動に参加してきた経験から、地域の観光に限らず農業、漁業も地域振興という観点で地域の活性化とリンクして取り組むべきであると考えるに至った。

従前の市町村合併で、私の住んでいる大分県北部郡佐賀関町は大分市に編入された。地域の振興活動に伴つて、行政との意思疎通、政治との折衝、予算の獲得、地域の協力、行政からの応援など解決しなければならぬ事柄が多く派生する。

行政スケールの大小という点では双方に一長一短あるが、そういういた諸問題を抱えたなかで、地域の活性化を図ろうとすれば、個人の力では自ずと限界がある。継続的な人的ネットワーク作りとヒトづくりが必須である。地域振興に貢献し得る人財を育て鍛えあげる場所づくりも必要不可欠である。

地域振興には企業誘致などいろいろの方策がある。その一つである観光は、奥深く裾野が広い産業である。観光は単に食・

文化・遊樂(=遊)に限らず、宿泊施設、お土産品、飲食店、観光名所、自然景觀、文化景觀、歴史遺産、文化遺産・輸送手段などの多数の業種の相互連携で成りたつ産業である。また観光客から常に

高橋 幹雄氏

高橋 幹雄氏のご提言

私は家業の菓子屋を継ぐため京都で修業時代を過ごした。そ

の時に初めて故郷大分のとりわ

3

土地柄の良し悪しも問われるところになる。観光資源は、時代と共に多様化してきた。新婚旅行のケースのように別府市や宮崎市などは、その正負の影響を強くうけてきた。

英国でラグビーワールドカップが開催されてから、観光のコンテンツとしてスポーツが見直され始めている。私は空手の愛好家で子供達に指導している。大分県に世界基準を満たす武道場の建設が決定したことは大変喜ばしいことである。武道のグローバル化には目を見張るばかりであり、国際的な武道の大会を誘致することができれば、県内の競技力の向上と経済効果の両面で大分県にとって一挙両得です。

プロ、アマ、性別、年齢を問わず、スポーツ熱の高まりが観光の追い風になっている。世界規模の大きな大会に限らず、さまざまなレベルのスポーツ大会でも競技者だけでなく同伴者、観客も観光客として誘致できる。そのため廃校になつた校舎や運動場を常時利用できる合宿所、練習場、キャンプ地として整備し、新しい価値を付加し観光資源として活用すべきと考えている。時代の要請に応じたところで残念なことは、大分

県民に限らず自分たちの住む地域について、無関心な人が多すぎるということである。観光資源ひとつをとっても宝の持ち腐れになっている。常に外の目を意識してアイデアを出し行動を起こせば、観光は比較的小資本で地域の発展に貢献しうるうつつけの振興策である。例えば「豊後水道おさかなめぐりの旅」なども魅力ある観光商品になり得る。

前述のように観光の種ともいえべき食と楽(=遊)は時代の影響を受ける。それだけに観光客をお迎えする我々は常に勉強、研究を怠つてはならない。南の交通アクセスも格段によくなつた今こそ、東九州観光圏の組み立てに再度挑戦してみるのも良いと考えている。

皆様ご承知のように、大分県には様々な観光資源があり決して温泉だけではない。

観光立国への大分県の挑戦は始まつたばかりです。観光の基本はいざれにしても県民のお一人お一人が常におもてなしの心を意識して、観光客にきめ細かな対応を心がけることに尽きるのではないかでしょうか。

その他のご意見やご提言

- ・ 大分に着任した時、ゴミの少ないきれいな街という印象を

大分大学の下田 憲雄氏による閉式のご挨拶

皆様のおかげで4時間に及ぶ長丁場のシンポジウムを成功裡に終えることができました。関係者とりわけ講師・パネラーの皆様には心より感謝申しあげま

もつた。暫くして、住んでよし、訪れてよしの感を強くした。地域の魅力を高める努力を怠つてはならない。

・ その土地のもつ生活の匂い、清らかさ、美しさなどを求めて、歩ける街づくり、歩きたくなる街づくりを目指そう。

・ 小藩分立も逆説的に考えれば、それだけ多様性に富んだ歴史、文化があるということであり財産である。ポジティブに考え活用していくこう。

・ 大分県はブランディングといふ面ではシンプルに打ち出しがいい。イメージ戦略の「おんせん県おおいた」の成功に満足することなく、戦略的に二の矢、三の矢を準備していく必要がある。

・ 国際感覚ならびに感性に秀れた外国の留学生・OG・OBを組織して、広く国外に大分を売り込むための戦略的な仕組みづくりを急ぐべきである。・ 外国からの観光客に分かりやすい観光案内板などの設置は喫緊の課題である。

おわりに

当初は大分大学大学院同窓会四極青雲会の会報「青雲」第五号の特別企画として、大分市内に立地するホルトホール、大分駅ビルと商業施設、オアシスホールと県立美術館の3つのエリアの代表者と当会会員で、中

心市街地の現状と課題という

テーマで討論会を開催していま

した。母校では

観光学会にご所

属の大井先生が

す。シンポジウムを通じて活発な議論や意見交換がおこなわれたことを嬉しく存じます。本日ご参加の学生諸君にとつても貴重な経験になることでしょう。

都市型観光が注目されているだけに、実にタイムリーで内容の濃いシンポジウムになつたのであります。大分が都市型観光の絶好の成功事例になりうるのではないかと希望を抱かせるものでは、今後の展開に相応しい内容で、今後に期待したい。

32回生 岩尾 明 記

皆様、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

四極青雲会事務局

同様な企画を構想しておられました。そこで大学院研究科長の下田憲雄先生のアドバイスもあり、今回の共同開催が実現しました。四極青雲会は結成間もない若い組織ですが、今後も地域振興に関連の深い同様の企画を積極的に取り上げていくつもりです。

下田憲雄先生のアドバイスもあり、今回の共同開催が実現しました。四極青雲会は結成間もな



シンポジウムを終えて記念撮影